『河瀬正利先生退官記念論文集　考古論集』（2004 年）所収

弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器をめぐって

野島　永

はじめに

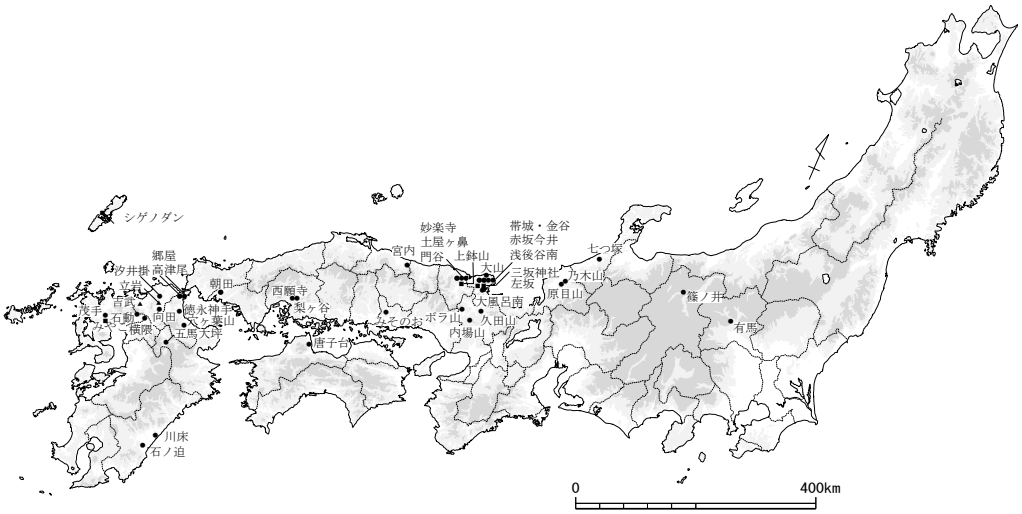
鉄器を副葬する墳墓は，弥生時代後期に日本列島に広く普及した。その中でも鉄製刀剣類を頂点として鉄器を多量に副葬する集団墓は，九州北半部と近畿北部に多くみられることを指摘し，近畿北部の各地域は，その周辺に鉄製武器を供給する仲介的交易地として機能したと想定する。なかでも，大陸から舶載された鉄刀や刃関に双孔のある倭独自の拵えをもつ鉄剣の普及については，近畿北部や北陸の首長達の果たした役割が大きかったものとみられる。

しかし一方で，弥生時代終末期（近畿地方庄内式併行期），漢魏鏡の流入によってそれらを副葬する墳丘墓が瀬戸内から近畿中部を中心に広がっていく。漢魏鏡を副葬する墳丘墓のなかには，古墳時代に継承される鉄製武器の初源的型式を示すものも多い。いわゆる舶載三角縁神獣鏡の副葬開始前後までの鉄製武器の地域性とその流通について概観していきたい。

1．弥生時代後期における鉄器多量副葬墓の出現

弥生時代中期以前，墳墓における鉄器副葬は九州地方北部やその周辺地域にしかみられないものであったが，後期前葉には山陽・山陰から近畿北部，後期後葉から終末期前後には北陸から関東・中部に至るまで日本列島各地で広範に鉄器の副葬が行われはじめたことがわかってきた。弥生時代後期において鉄器副葬が盛んに行われた集団墓[(1)]や首長墓についてみてみたい（第 1 図）。

九州では，鉄器副葬集団墓は中期後葉から後期前葉に筑前南部地域周辺に広まる[(2)]。後期後葉までには，筑前東部地域から豊前地域を含めた九州北東部，さらに終末期には九州南部にも認められるようになる[(3)]。これらの集団墓の副葬鉄器は，九州北部中枢域の甕棺墓制と比較すれば，その貧弱な様相はあきらかである。このような集団墓においては，



第１図　弥生時代主要多量鉄器副葬墓の分布

（▲ 中期　■ 後期前葉　● 後期中葉－終末期）

素環頭鉄刀や鉄剣などを副葬する場合もみられるが，墳墓や墓壙の規模において他のものと比べて著しい格差はない。[(4)] 漢代に文房具として扱われた書刀（素環頭刀子）や削（鉇）の副葬を専ら行うといった状況を窺うことができる。小地域を統括する首長層や上層の社会構成員の所有品と考えることができようか。これとともに後期中葉前後から破鏡や加工鏡片の副葬なども始まる。

中国･四国では，後期中葉前後から鉄器を副葬する集団墓がみられるようになる。[(5)] その数は決して多くはない。埋葬が多数にわたる場合でも，その中心にはより大きな墓壙をもつ埋葬主体が顕現している場合が多い。この地域では中期後葉以降，墳丘墓を発達させる。鉄製武器や工具の副葬が大形墳丘墓など支配者層の墳墓ではなく，より低い階層を中心として造営されたと考えられる集団墓において実現したことが，明瞭にみてとれる地域である。[(6)]

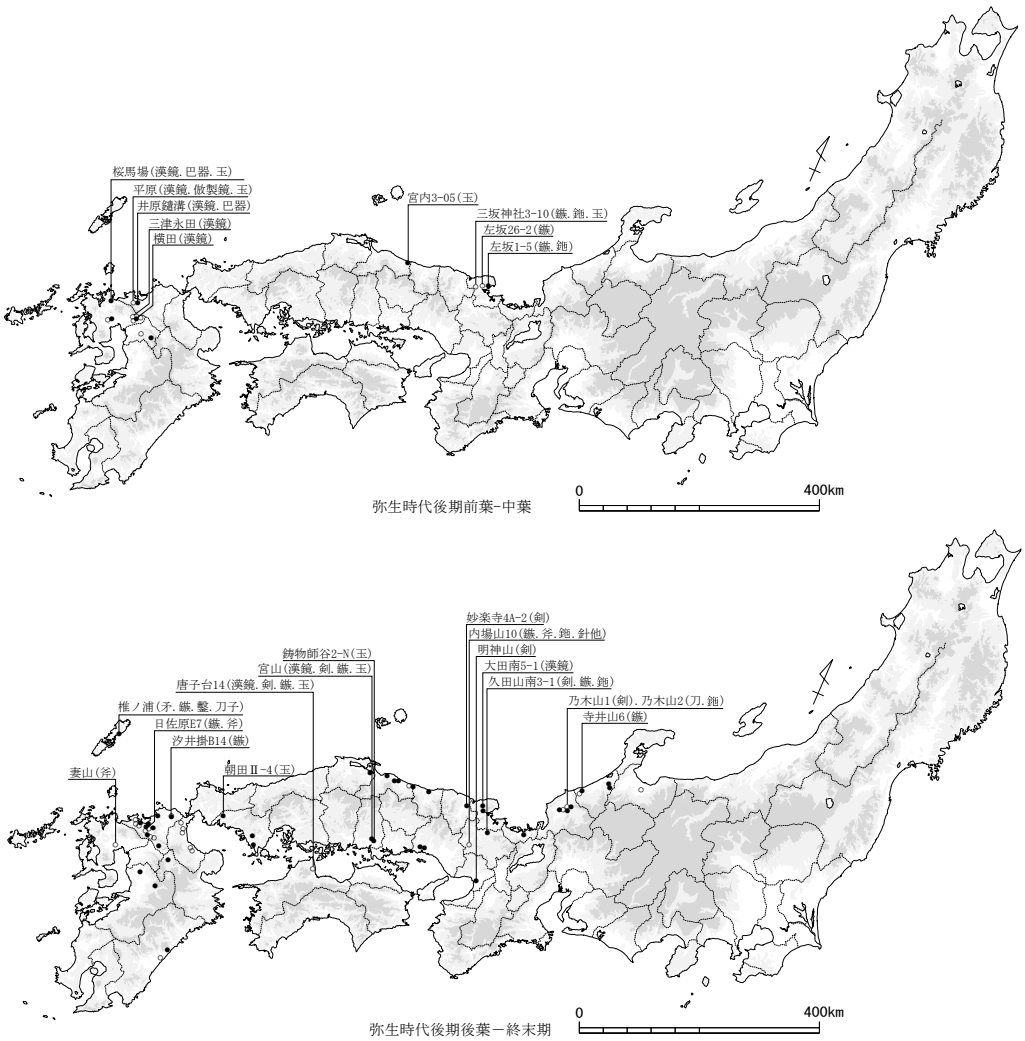
近畿北部・北陸では，近年とくに鉄器副葬を盛んに行う集団墓が調査された地域である。集団墓の調査例は，兵庫県北部（但馬）円山川流域の豊岡市周辺と，京都府北部（丹後）竹野川・福田川流域，野田川流域に集中する。後期前葉には，尾根状に方形台状の区画をもつ集団墓において鉄器副葬が始まる。[(7)] 日本海側沿岸の各地に鉄器副葬が行われはじめる足がかりとなったようである。とくに墓壙数の少ない大形方形台状墓の中心埋葬は，墓壙規模が概して大きく，鉄製刀剣類を副葬する傾向がある。[(8)] 北陸でも山陰と同様に副葬鉄器，とくに鉄製刀剣類が多く出土するのは，四隅突出形墳丘墓ではなく方形台状墓であるといえる。[(9)]

関東・中部でも埋葬形式はそれぞれ異なるが，副葬鉄器が多く出土する集団墓がみら

れるようになってきた。[10] とくに関東・中部では後述するように，中期に九州北部でみられたような刃関に双孔を穿つ鉄剣や帯金を螺旋状に巻いた鉄釧の副葬が広がる。近畿以西にみられる鉇や鉄斧など鉄製工具の副葬は少ない。

九州北部の甕棺墓制における鉄刀・鉄剣は，支配者層の個人的所持品であり，鉄戈は葬送に際して副葬品として消費されるものであった。しかし，弥生時代後期後葉以降，墓壙規模や他の副葬品からみても，より低い階層の民衆が生前の生活において使用した鉄器を副葬したと考えられる場合が多くなる。

それに対して山陰東部や近畿北部，北陸の一部の集団は，後期前葉以降，方形台状墓の中心に大規模な墓壙を穿ち，鉄製刀剣類を副葬する葬送を行い，周囲に埋葬を継続さ



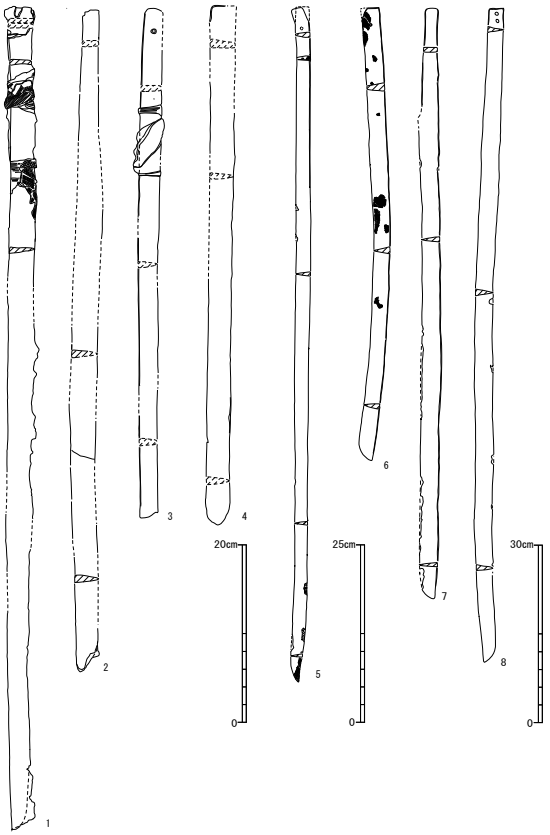
第２図　素環頭鉄刀および鉄刀の出土地と共伴する副葬品
（○ 素環頭鉄刀出土地　● 鉄刀出土地）

せる共通した墓制をもつようになる。山陰や北陸では後期後葉以降，四隅突出形墳丘墓が展開していく地域であるが，四隅突出形墳丘墓からは，鉄器の副葬はそれほどみられず，むしろ方形に区画される台状墓や周溝墓に，鉄製刀剣類を頂点とした鉄器副葬が顕著にみられる状況を窺い知ることができる。弥生時代後期の鉄刀や鉄剣など鉄製武器の流通は，方形台状墓を営んだ集団同士の地域を越えた連携を機軸として，近畿以東にもたらされたと推測することも可能ではなかろうか。

2. 弥生時代鉄刀副葬の普及とその地域性

九州では，後期前葉には佐賀県神崎郡を中心とした佐賀平野やその周辺において副葬鉄刀，とくに素環頭鉄刀の出土例が目立つ。後漢鏡と共伴するものが多い(第2図上段)。[11]

近畿北部においても，弥生時代後期初頭にはすでに素環頭鉄刀が出土したことは注目される。全長30㎝前後の小刀であるが，いずれも単独で副葬されたものではなく，鉄鏃や鉇などと共伴している。[12] やや下る後期中葉前後，鳥取県東伯郡宮内第1遺跡1号墓第2主体からは全長94㎝の大刀が出土している（第3図1）。[13]



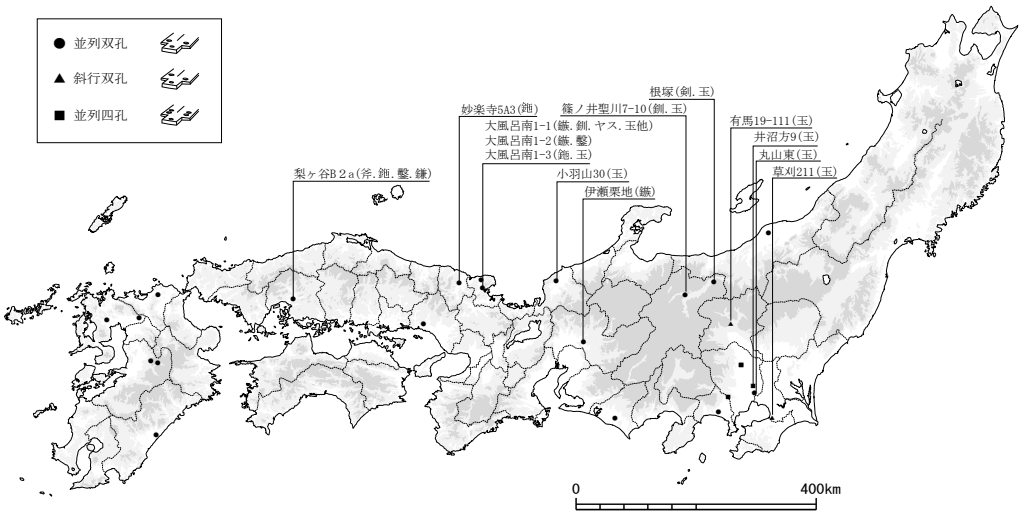
第3図　日本海沿岸地域の弥生時代鉄製大刀

1. 鳥取県宮内1号墓第2主体例　2. 鳥取県宮内3号墓第1主体例
3. 鳥取県宮内3号墓SX05例　4. 鳥取県宮内3号墓SX01例
5. 兵庫県妙楽寺墳墓群A4区第2主体例　6・7. 福井県原目山墳墓群例　8. 福井県乃木山墳丘墓第1埋葬施設例

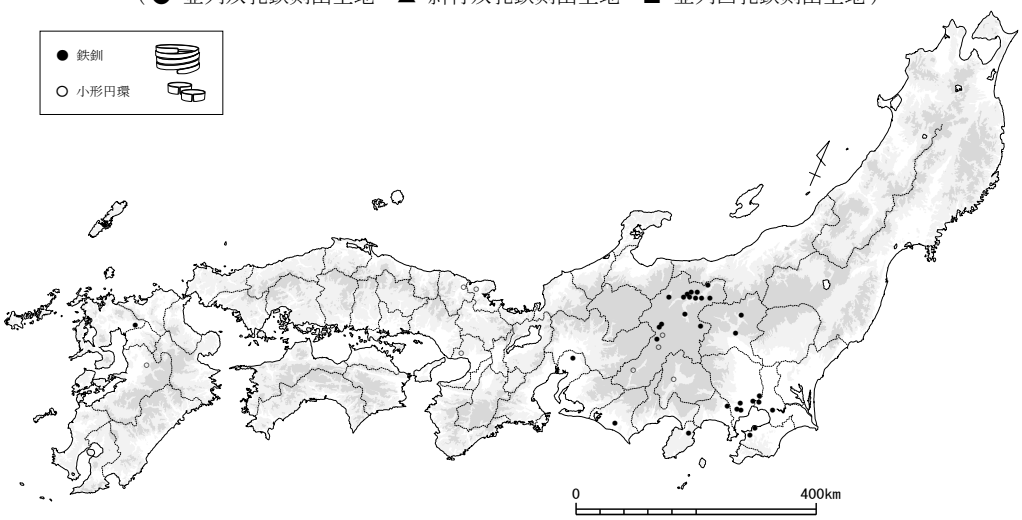
後期中葉から終末期には，素環頭鉄刀や鉄刀の出土例は激増する。九州北部では，小刀や素環頭刀子などであれば，副葬品と同様のものが集落からでも出土するようになる。個人所有品を副葬したと考える所以である。

また，日本海沿岸の山陰･北陸の諸地域でも副葬が継続される（第2図下段)。第3図は，方形台状墓から出土した鉄刀の類例である。1は，先述した宮内第1遺跡1号墳丘墓第2主体部出土例である。茎部分には3枚以上重ねられた布状の有機質の痕

跡や，革紐状の有機質を巻いた痕跡が明瞭に認められる。[14] 木製刀装具を備えてはいなかったものとみられる。3 号墳丘墓 SX01（第 3 図 4）も同様に環頭や明瞭な関をもたず，布状の付着物と紐状の有機質を巻いた痕跡がある。紐あるいは蔓を巻いただけの単純な拵えを施していたものであろう。舶載されたものであれば，おそらく環を備えていたと思われることから，環頭部分を切断したものとみられる。兵庫県妙楽寺墳墓群 A4 区第 2 主体部から出土した大刀（第 3 図 5）も，全長 94.5cm，宮内第 1 遺跡例と同様に，明瞭な関がなく茎に環頭がみられないものである。鋒には 7 枚程に重ねられた布状の付着



第 4 図　双孔鉄剣等の出土地と共伴する副葬品（後期後半－終末期）
（● 並列双孔鉄剣出土地　▲ 斜行双孔鉄剣出土地　■ 並列四孔鉄剣出土地）



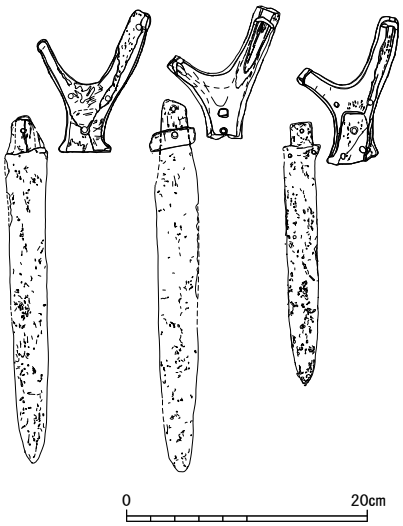
第 5 図　鉄製釧および鉄製小形円環出土地（後期後半－終末期）
（● 鉄製釧出土地　○ 鉄製小形円環出土地）

物がある。茎部には木質がわずかに遺存している模様である。[15] この他，福井県福井市原目山墳墓群出土大刀（第３図６・７）[16] や，福井県吉田郡松岡町乃木山方形墳丘墓第１埋葬主体施設（木槨墓）出土大刀（第３図８）[17] などは１ｍを超える優品である。この乃木山方形墳丘墓第１埋葬施設からは，他に素環頭をもつ鉄剣，第２号埋葬施設からは鉄剣様の把拵えをもつ素環頭鉄刀が出土している。この鉄刀の環頭部分は切断され，ともにに副葬された他の鉄刀に銹着している。鞘木の節帯をデフォルメした鉄剣通有の把が拵えてあるが，素環を切断したままの茎尻をうまく覆うように二枚の把木を合わせて加工されている。鋒は剣のように両刃に仕上げられている。素環頭鉄刀を両刃の剣に改変するといった再加工を行っていることがわかる好例である。

後期以降，山陰から北陸にかけての地域では，九州北部よりも長大な鉄刀を入手したが，鉄刀独自の木製把拵えが定型化していないようである。鉄剣に比べて鉄刀には社会的立場や地位を表徴する意味合いが低かったために，剣とは異なる木製把拵えの定型化が図られなかった，あるいは，環頭部分の切断など茎尻の改変が行われたり，鋒を両刃に仕上げたりして鉄剣に改変されたものと説明することができる。

3. 刃関双孔鉄剣の地域性とその分類

刃関双孔鉄剣とは，剣の関部分でも刃部側に２孔が穿たれているものを総称した。このような短茎刃関双孔の鉄剣は近畿あるいは瀬戸内沿岸部を含む中国・四国よりもむしろ中期以来存続する九州北部や，後期後葉以降出土例が急増する東海・関東にみられるものといえる（第４図）[18]。これらは，刃関に双孔があるものでも双孔を結ぶ直線が剣身に直交するもの，つまり剣鋒を上にすると双孔が水平に並列するもの（並列双孔鉄剣）と，双孔が水平に並列せず，剣身に斜行して交わるもの（斜行双孔鉄剣）に分けることができる。また，刃関に目釘孔を穿つが２孔ではなく並列２段に４孔穿つもの（並列四孔鉄剣）もある。現状の出土例からは，並列双孔となるものは九州北部・近畿北部・中部高地・東海･関東に分布する。共伴する遺物は地域ごとに異なっており，東海では多孔型銅鏃，[19] 関東ではガラス小玉を中心とした各種玉類とともに副葬される（第６図）。また，関東では鹿角製把を装着



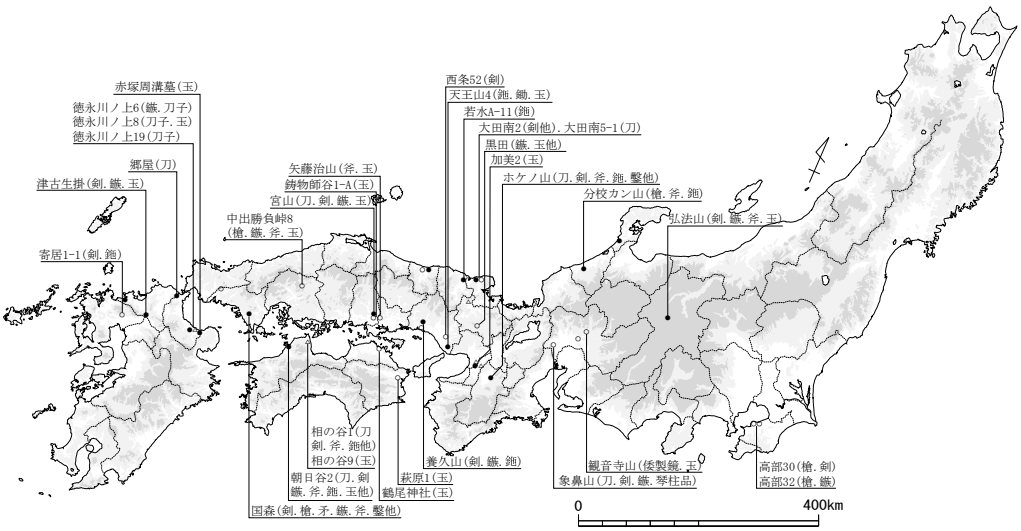
第６図　群馬県有馬遺跡出土鉄剣と新保田中村遺跡出土鹿角製把頭装着想定図

するために刃関孔が利用されるといった場合がある。[20] 京都府竹野郡弥栄町奈具谷遺跡における刃関並列双孔鉄剣の木製把装具や，神奈川県秦野市砂田台遺跡の第 7・146 号竪穴住居から出土した板状鉄斧に再加工された刃関並列双孔鉄剣などの類例[21]からすれば，おそらく，弥生時代中期後葉にはすでに刃関並列双孔鉄剣が九州北部以外にも波及していたことがわかる。

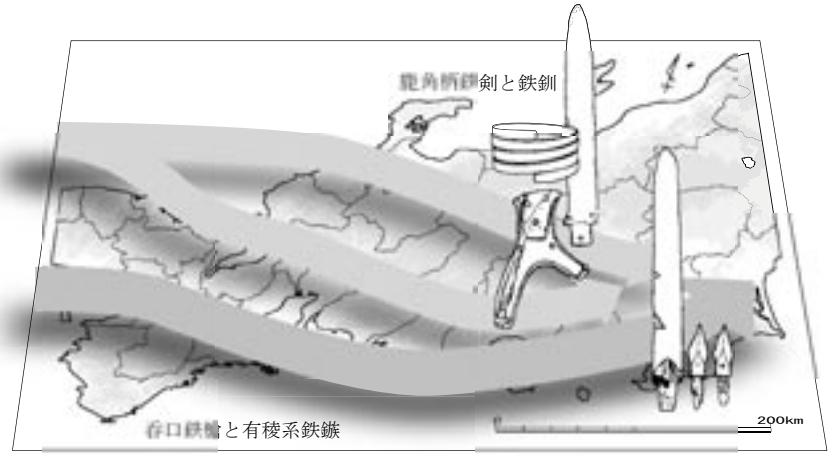
この他，鉄釧も刃関双孔のある鉄剣と同様に九州北部に遡源をもち，後期後半から終末期には，中国･四国や畿内地域を介さずに関東･中部に広く普及する鉄製品である（第 5 図）。この鉄釧の分布から憶測すれば，中期後葉以降におそらく当時唯一の製作地であった九州北部との交易を行った近畿北部や北陸から中部･関東などの諸地域に，このような刃関並列双孔鉄剣がもたらされたていたと想像できる。後期後葉には，近畿北部から東海にかけての地域圏でも刃関双孔鉄剣が生産されはじめたと考えられ，関東でもそれに準じつつも，鹿角製の鍔や把などの独自の拵えをもつ外装を創り出すことになったといえる。伝統的ともいえる関東独自の鹿角装の把拵えを発達させていったものとみられる。

4. 漢魏鏡といわゆる舶載三角縁神獣鏡の副葬と鉄製武器の地域性

漢鏡や一部の魏鏡が副葬される墳丘墓は，弥生時代終末期前後に出現する。瀬戸内周辺から近畿を中心として,北陸や中部,あるいは関東以東にまで広く波及する（第 7 図）。



第 7 図　漢魏鏡出土墳丘墓･古墳と主要共伴副葬品（弥生時代終末期－古墳時代初頭前後）
（● 完形鏡　○ 破砕鏡　△ 破鏡･加工鏡片）



第８図　鹿角柄鉄剣と鉄釧、呑口鉄槍と有稜系鉄鏃の流通（弥生時代終末期～古墳時代初頭）

副葬される漢魏鏡の面数はいまだ一面に限られる場合がほとんどで，一様に破砕される。共伴する鉄器の器種も依然乏しく，その総数も概して少ないが，瀬戸内北岸域を中心として鉄剣･鉄槍や鉄鏃を揃える一群がみられる[22]。鉄槍は，把木を４つ組み合わせ，糸巻きと黒漆塗りを施し，把縁を山形に造形する，いわゆる呑口式の鉄槍[23]で，鉄鏃は小形有稜系の鉄鏃[24]となる。九州北部や山陰･近畿北部では，このような鉄槍と小形有稜系鉄鏃の多量副葬は目立たない。このような新しい鉄製武器の創出に際して，その中枢には参画していなかったことを示すものであろう。しかし一方で，遠く関東南部の千葉県市原市神門墳墓群４号墳では，このような鉄槍と鉄鏃が出土している。また，千葉県木更津市高部墳墓群 30 号墓でも，破砕された二神二獣鏡と鉄剣・鉄槍，同 32 号墓でも，半肉彫四獣鏡片とともに鉄槍や小形有稜系鉄鏃が出土している[25]。やや下るが，千葉県袖ヶ浦市椿古墳群 SX-3 主体部からも鉄剣と鉄槍，小形有稜系の柳葉式銅鏃と玉類が出土している[26]。後漢末葉の舶載鏡などとともに，瀬戸内北岸域から近畿地方中部にかけての地域との交流によってもたらされた公算が高いといえるものである。前にみたように，後期後葉前後に中部や関東を中心として刃関双孔鉄剣を含む鉄短剣や，ガラス小玉，鉄釧などが副葬されはじめており，独自の副葬鉄器の様式を確立するようにもみえたが，直後には新たな鉄製武器様式への交替が起こりはじめたものとみることができる（第８図）。

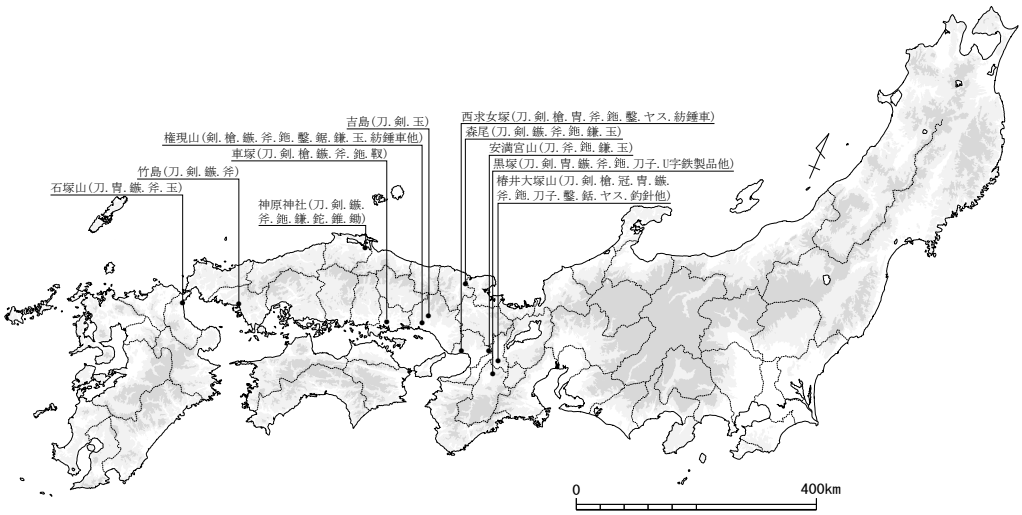
最後に舶載三角縁神獣鏡を保有する前期古墳では，その初頭から非常に多くの鉄器が副葬されたことがわかる(第９図)。先ほどの漢魏鏡の出土地分布よりも範囲が狭くなり，瀬戸内東部周辺から近畿中部に偏る傾向をみせる。舶載の素環頭大刀を副葬するものが多くなる。環頭部分を作り変えるものもあるが，多くは環を切除せず，新たに定型化した木製刀装具を備えるものである[27]。鉄剣では，以前からみられた短身･短茎，短身･長茎

の類のほかに長剣が加わる。さらに把縁を山形に造形し，糸巻きと黒漆塗りを施す鉄槍や数種類の小形有稜系鉄鏃の普及が認められる。また，鉄斧・鉇をはじめとする鉄製工具は多岐にわたる。一部には鉄刃農具や漁撈具をもち，その種類と形態は地域を越えて共通点が多い。同工品とさえいえるものまで存在する。器種・数量ともに第７図のそれをはるかに凌駕するといって差し支えない。[28]

5. ま と め

弥生時代終末期までに山陰から北陸にかけて普及する鉄刀は，長大ではあってもいわゆる呑口式鉄槍にみられるように，すべてに完成された木製装具を具備するものではなかった。舶載された素環頭大刀の環頭を切除するといった受容者側独自の改変によって，新たな意味づけが行われていたといえる。逆に言えばひとつの仮説として，素環頭大刀をそのまま佩用していても，所持者の社会的地位の表徴とはなり得ない状況であったと想像できる。関東の鹿角装刃関双孔鉄剣についても，縄文時代以来の呪術性を基調とした意匠を温存していることが推測されているが，[29] 在地的な独自の社会的地位の表徴として鉄剣装具を独自に拵えていたものと想定することができよう。九州北部から近畿北部・北陸，中部・関東へと至る文物の交易ルートが確保されていたとしても，供給者側が鉄製武器に付与していた意味合いまでをも共有してはいないことがわかる。

しかし，関東南部にわずかに波及した鉄槍や小型有稜系鉄鏃には，改変の痕跡がみられない。供給者側の社会的地位表徴をも共有しはじめていたとみることができる。いわ



第９図　三角縁神獣鏡出土古墳と主要共伴副葬品（古墳時代前期前葉）

ゆる舶載三角縁神獣鏡が配布される直前には，地域社会に見合った鉄製武器による地位表徴から脱却し，より大きな社会統合に向かうための変革によって新たな地位表徴が必要とされたものとみることができよう。鉄槍や小型有稜系鉄鏃などにみられる高い規格性からすれば，それらを大量に生産するためには，鉄鍛冶だけではなく，拵えのための木工，樹脂皮膜塗布などといった，各種材質を扱う高度な技術の集約が必要であり，おそらくは畿内中枢地域において副葬器物の製作技術体系の集約と組織管理が達成されていく過渡的な様相を示しているといってよい。

付　記

河瀬先生には一方ならないお世話になっている。多くの教え子のなかの一人である私は，9 年前，先生と御夫人に結婚式の仲人を懇願した。遠く広島からわざわざ京都まできていただき，なんとか披露宴まで済ませることができた。披露宴の席上，仲人には幾度となく酒を勧められ，愚妻との記念撮影では泥酔状態であった。献呈するにはあまりに不充分な小文ではあるが，ささやかな御礼の気持ちとさせていただきます。そして先生のご健康をお祈り申しあげます。

注

(1)　鉄器副葬が盛行した集団墓とは，甕棺墓や土壙墓・石棺墓・木棺墓の別や，墳丘の有無に関わらず，少なくとも数基以上の同形式埋葬が繰り返されることによって特定の集団の墓域とみなしうるもので，10 点前後あるいはそれ以上の副葬鉄器がみつかった墓群を便宜的にさす。

(2)　福岡県小郡市横隈狐塚遺跡などがある。
速水信也『横隈狐塚遺跡』Ⅱ，(小郡市教育委員会，1985 年)。

(3)　筑前東部地域から豊前地域については，福岡県鞍手郡若宮町･宮田町汐井掛遺跡や同県北九州市高津尾遺跡，福岡県京都郡豊津町徳永川ノ上遺跡，福岡県築上郡大平村穴ヶ葉山遺跡などがある。
池辺元明編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXⅢ(福岡県教育委員会,1979 年)。池辺元明編『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』第 2 集（福岡県教育委員会，1980 年)。柴尾俊介編『高津尾遺跡（16 区の調査）－九州縦貫自動車道関係文化財調査報告 25-』4(北九州市埋蔵文化財調査報告書第 102 集,(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室,1991 年)。柳田康雄編『徳永川ノ上遺跡』Ⅱ（一般国道 10 号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第 7 集，福岡県教育委員会，1997 年)。伊崎俊秋･緒方泉『土佐井ミソンデ遺跡･穴ヶ葉山 4 号墳･穴ヶ葉山墳墓群』(大平村文化財調査報告書第 7 集,大平村教育委員会,1991 年)。
　さらに，九州南部では，宮崎市石ノ迫第 2 遺跡や宮崎県児湯郡新富町市川床遺跡群などがある。
鳥枝誠・稲岡洋道・宇田川美和『石ノ迫第 2 遺跡』(宮崎市文化財調査報告書第 40 集，宮崎市教育委員会，1999 年)。『川床遺跡』(新富町教育委員会，1986 年)。

(4)　弥生時代後期の各地の墳墓や墓壙の規模と鉄器副葬頻度の相関の地域的差異については，次の文献で述べた。
野島永「弥生時代の鉄器副葬をめぐって」(『考古学ジャーナル』No.491，ニュー･サイエン

ス社，2002 年，6 ～ 10 頁)。
(5) 岡山県御津郡御津町みそのお墳墓群や鳥取県東伯郡東郷町宮内墳墓群などがある。
椿真治・氏平昭則他『みそのお遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 87，岡山県教育委員会，1993 年)。原田雅弘・濱田竜彦・遠藤秀光他『宮内第 1 遺跡・宮内第 4 遺跡・宮内第 5 遺跡・宮内 2 ～ 63・65 号墳』(鳥取県教育文化財団調査報告書 48，(財)鳥取県教育文化財団，1996 年)。
(6) 松木武彦「副葬品からみた古墳の成立過程」(『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集，大阪大学考古学研究室，1999 年，185 ～ 204 頁)。
(7) 兵庫県豊岡市上鉢山・東山墳墓群や京都府中郡大宮町三坂神社墳墓群・同町左坂墳墓群・同町今市墳墓群などがある。
瀬戸谷晧編『豊岡市上鉢山・東山墳墓群』豊岡市文化財調査報告書第 26 集・豊岡市立郷土資料館報告書第 26 集，豊岡市教育委員会，1992 年)。今田昇一・肥後弘幸他『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』(京都府大宮町文化財調査報告書第 14 集，大宮町教育委員会，1998 年)。今田昇一『左坂墳墓群発掘調査現地説明会資料』(大宮町教育委員会，1993 年)。肥後弘幸・細川康晴「左坂墳墓群 (左坂古墳群 G 支群)」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会，1994 年)。橋本勝行・中川和『今市古墳群・墳墓群・経塚発掘調査概報』(大宮町文化財調査報告第 19 集，大宮町教育委員会，2001 年)。
(8) 京都府中郡峰山町赤坂今井墳丘墓や同府与謝郡岩滝町大風呂南 1 号墓などがある。
黒坪一樹・石崎善久「赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第 92 冊，(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター，2000 年，1 ～ 20 頁)。石崎善久『赤坂今井墳丘墓第 3 次発掘調査概要報告』京都府遺跡調査概報第 100 冊，(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター，2001 年)。白数真也・肥後弘幸他『大風呂南墳墓群』岩滝町文化財調査報告書第 15 集，岩滝町教育委員会，2000 年)。
(9) 福井県吉田郡松岡町乃木山古墳，石川県河北郡津幡町七野墳墓群などがある。
松井政信「乃木山古墳」(『発掘された北陸の弧運報告資料集』(まつおか古代フェスティバル実行委員会) 74 ～ 77 頁)。田中健一「七野墳墓群発掘調査」(『石川県立埋蔵文化財センター所報』第 39 号，石川県立埋蔵文化財センター，1993 年，5 頁)。
(10) 長野市篠ノ井遺跡群の円形周溝墓や群馬県渋川市有馬遺跡の礫床墓などがある。
田中正治郎・澤谷昌英他『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』4 ((財) 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 33，長野県教育委員会・(財) 長野県埋蔵文化財センター，1998 年)。佐藤明人編『有馬遺跡』Ⅱ ((財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 102 集，群馬県教育委員会・(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団，1990 年)。
(11) 佐賀県唐津市桜馬場甕棺墓や佐賀県神崎郡東背振村三津永田 104 号甕棺墓の他に，佐賀県神崎郡東背振村横田石棺墓などがある。
杉原荘介・原口正三「佐賀県桜馬場遺跡」(日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』本文編，東京堂，1961 年，133 ～ 155 頁)。金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」(日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』本文編，東京堂，1961 年，157 ～ 172 頁)。木下之治「神崎郡東脊振村横田遺跡」(『新郷土』20-1，佐賀県文化会館，1967 年)。
(12) 前掲注 (7) 今田・肥後文献。今田文献。
(13) 前掲注 (5) 原田・濱田・遠藤他文献。
(14) (財) 元興寺文化財研究所保存科学センター「宮内遺跡出土刀剣類の分析」(前掲注 (5) 原田・濱田・遠藤他文献) 251 ～ 262 頁。御教示いただいた池淵俊一氏に感謝したい。
(15) 中村由美・宮村良雄・瀬戸谷晧・松井敬代『豊岡市妙楽寺墳墓群』豊岡市文化財調査報告書第 32 集，豊岡市教育委員会，2002 年，105 ～ 106 頁)。実見に御配慮いただいた瀬戸谷晧氏に感謝したい。
(16) 福井市史編纂委員会編「原目山墳墓群」(『福井市史』資料編 1，考古，福井市，1990 年)。佐々木勝「福井県の鉄製品の様相 - 北陸地域の墳墓出土資料を中心として -」(『平成 13 年度環日本海交流史研究集会　鉄器の導入と社会の変化』(財) 石川県埋蔵文化財センター，2002 年，56 ～ 93 頁)。なお，出土遺物の全容については未報告のため詳らかではない。実見に御配慮いただいた松村知也氏に感謝したい。
(17) 注 (9) 松井文献。実見に御配慮いただいた松井政信氏と佐々木勝氏に感謝したい。
(18) 野島永・高野陽子「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓 (3) 」(『京都府埋蔵文化財情報』第 83 号，(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター，2002 年，25 ～ 36 頁)。
(19) 斎藤基生・可児光生・磯谷祐子『伊瀬栗地遺跡発掘調査報告書』(美濃加茂市教育委員会，1994 年)。御教示いただいた藤村俊氏と磯谷祐子氏に感謝したい。
(20) 神奈川県平塚市王子ノ台遺跡 5 号方形周溝墓や千葉県市原市 211 号土坑などから出土した関東の刃関双孔鉄剣の茎には鹿角片が遺存しているものがある。
宮原俊一「王子ノ台遺跡出土の鉄剣と類例」(『王子ノ台遺跡』第Ⅲ巻，弥生・古墳時代編，東海大学，2000 年，654 ～ 658 頁)。

なお，川越哲志氏は，叉状角製品・鹿角製有鉤短剣を鉄短剣の祖源とした。東日本では，縄文時代以来，それらを狩猟技術に長けた集団統率者の所持品としたとして，鹿角製短剣が縄文時代以来の伝統的な集団統率者の地位表徴であることを指摘している。
川越哲志「鉄剣・短剣の歴史的意義」(『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版，1993 年，182 ～ 184 頁)。
また，大前篤子氏も，角製鳥形短剣・鹿角製有鉤短剣を鹿角製把頭（有角柄装具）鉄剣の祖源とし，鹿角の鉤部から儀器としての呪的機能を想定する。
大前篤子「刀剣装具の装飾とその社会的意義―木製・鹿 製刀剣装具を中心に―」(『滋賀史学会誌』第 13 号・特集号，滋賀史学会，2001 年，69 ～ 88 頁)。

(21) 柴暁彦「丹後国営農地開発事業（東部・西部地区）関係遺跡　平成 8 年度発掘調査概要　(1) 奈具谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第 76 冊，(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター，1997 年，2 ～ 29 頁)。宍戸信悟他『砂田台遺跡』Ⅰ（神奈川県立埋蔵文化財センター，1989 年)。宍戸信悟他『砂田台遺跡』Ⅱ（神奈川県立埋蔵文化財センター，1991 年)。

(22) 山口県熊毛郡田布施町国森古墳や広島県山県郡千代田町中出勝負峠 8 号墳などがある。
乗安和二三『国森古墳』(田布施町教育委員会，1988 年)。佐々木直彦編『歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群』(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 49 集，(財) 広島県埋蔵文化財調査センター，1986 年)。

(23) 弥生時代から古墳時代初頭の鉄槍については，菊地芳朗氏の次の論考を参考にした。
菊地芳朗「前期古墳出土刀剣の系譜」(『雪野山古墳の研究』考察編，雪野山古墳発掘調査団，1996 年，49 ～ 82 頁)。
第 4 回古代武器研究会（2003 年 1 月 11・12 日，滋賀県立大学）において，刃関双孔鉄剣の類例や鉄槍について豊島直博氏より御教示いただいた。感謝したい。

(24) 小形で厚みのある定角式鉄鏃・柳葉式鉄鏃・鑿頭式鉄鏃をさす。松木武彦氏の論考に詳しい。
松木武彦「前期古墳副葬鏃の成立と展開」(『考古学研究』第 37 巻第 4 号，考古学研究会，1991 年，29 ～ 58 頁)。

(25) 田中新史「市原市神門 4 号墳の出現とその系譜」(『古代』第 63 号，早稲田大学考古学会，1977 年，1 ～ 21 頁)。小沢洋「高部 32 号墳・30 号墳の概要」(埋蔵文化財研究会編『前期前方後円墳の再検討』発表要旨・資料集，第 38 回埋蔵文化財研究集会，埋蔵文化財研究会，1995 年，156 ～ 174 頁)。

(26) 小久貫隆史・高梨友子『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書―袖ヶ浦市椿古墳群―』8，(日本道路公団・(財) 千葉県文化財センター調査報告第 410 集，千葉県文化財センター，2001 年)。

(27) 町田章「環刀の系譜」(『研究論集』Ⅲ，奈良国立文化財研究所，1976 年)。

(28) 野島永「古墳時代初頭の鉄器について」(『近藤義郎古稀記念考古文集』考古文集編集刊行会，1995 年，133 ～ 138 頁)。

(29) 前掲注 (20) 川越文献。

図版出典

第1 図・第2 図・第4 図・第5 図　川越哲志編『弥生時代鉄器総覧』(東アジア出土鉄器地名表Ⅱ，広島大学文学部考古学研究室，2000 年)。を参考にして作成。

第3 図　注 (5)原田・濱田・遠藤他文献，注 (15) 文献，注 (16) 文献の各実測図を改変，再トレースして使用。

第6 図　金子浩昌「新保田中村前遺跡出土の骨角製品」(下城正編『新保田中村前遺跡』Ⅳ，(財) 群馬県埋蔵文化財事業団発掘調査報告書第176 集，(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団，1994 年)。第3 図 (13 頁) を改変，再トレースして使用。

第7 図・第9 図　埋蔵文化財研究会『定型化する古墳以前の墓制』(第24 回埋蔵文化財研究集会，埋蔵文化財研究会，第Ⅰ・Ⅱ分冊，1988 年)。埋蔵文化財研究会『倭人と鏡－日本出土中国鏡の諸問題－』(第35 回埋蔵文化財研究集会，埋蔵文化財研究会，第1・2 分冊，1994 年) を参考にして作成。

第8 図　注 (10) 佐藤文献，注 (25) 田中文献から実測図を一部合成して作成。